図面作成

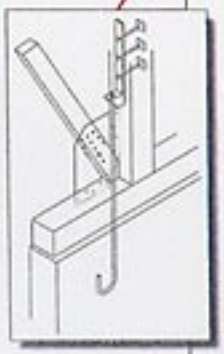
「見える化」で伏せ図の品質を向上

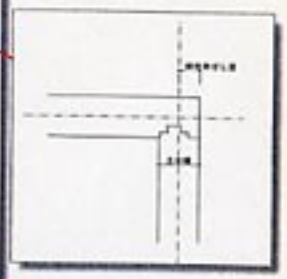
▼特例見直しに備えて伏せ図の作成手順や注意点について社内で標準化する。

▼マルダイは社内書類で注意点を「見える化」、混乱やブレが出ないように準備を進める。

「マルダイ」の構造設計スタンダード

1階床伏せ図に関して施工上の納まりの注意点をリストアップした。伏せ図の中に注意点を書き込み、納まりを具体的に図示している





土台隅部の納め方や玄関上がり框部の芯出し方法なども「構造設計スタンダード」の中に盛り込んでいる

図面の注意点を「見える化」

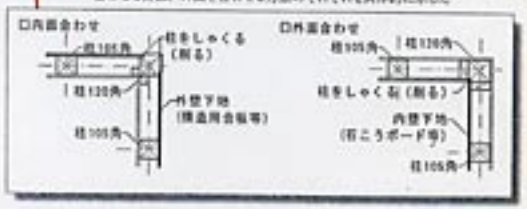
マルダイの「構造設計スタンダード」と、作成を担当する功刀（くぬぎ）友樹さん（写真左）と清孫さん（写真右）。木造の構造入門、構造図（伏せ図）の作成、伏せ図作成のための基礎知識という構成で構造図の作成手順をはっきり示すとともに、構造図のチェック方法、注意点をまとめている

店と取り引きする建材小売店で、構造材・羽柄材のプレカット工場も持つ。4号特例の見直しに備えて伏せ図の作成手順や注意点を標準化した理由について、同社社長の深沢裕一郎さんは「特例見直し後に伏せ図作成の責任はどうなるのか。明確な議論がないままに、ここまで来ている。どうなっても大丈夫なように対応すべきと考えた」と話す。

現状の木造住宅の構造図は、プレカット工場が加工図として作成したものを使用するのが一般的だ。プレカット用の加工図を「伏せ図」として確認申請図書に流用した場合、作成者ごとにルールが違っていたら建築主事に説明できない。そこで可能な限り統一するなど社内体制を整えることにした。新人からベテランまで使えてブレがない図面の作成手順と社内標準をつくろうと考えたのだ。

この考え方は住宅会社も参考にすべきだろう。同社の遠藤龍一さんは「今後、戸建て住宅の元請けとしてやっていくためには、社内で構造図を作成するルールを作成して構造の品質を高めること。そして少なくとも木造建築士の資格者を社内に置くことが必要」と強調する。

105ミリ角の柱と120ミリ角の柱を併用した場合の納め方について、内面を合わせる方法、外面を合わせる方法のそれぞれを具体的に示した



4号特例の見直しで問題になりそうなのが「伏せ図」（構造図）の扱いだ。建築確認でどこまで添付するのか。設計変更への対応はどうなるのか。構造設計の責任者は誰になるのか――現在、検討中のこれらがどうなるかで、実務への影響が大きく変わる。

上はマルダイ（静岡県富士市）が作成中の「マルダイ構造設計スタンダード」の一部。伏せ図の作成手順や注意点をまとめた資料はA4判で約250ページに及ぶ。

説明できるように

マルダイは約3000社の工務